

[江戸時代前期の絵画展によせて]

「輪舞図屏風」について

江戸時代前期の画壇を考える上で、町絵師達の存在を軽視することはできません。彼らは伝統に縛られることなく、求めに応じて自由に表現し、活力溢れる作品を数多く残しました。当館ではこのような町絵師達の作品を何点か所蔵しておりますが、今回はその中から、「輪舞図屏風」をご紹介します。

この屏風は四場面から構成されています。向かって左端には卯建の上げられた二階建ての遊廊を描き、その店先に童女を背負った遊女と、少し先を手をつないで歩く禿と唐子のように髷を結った童女を配しています。この童女は右の輪舞の方を指さし、自分達も早く踊りの輪に入りたいがっています。

次の輪舞の場面がこの屏風で一番の見せ場であることは言うまでもありません。ここでは、実に六十七人も人物が描かれ、美しい衣裳をまとった遊女、禿、童女達が手をつないで大きな輪になっています。一人一人の人物は垂髪や兵庫髷など髪形を変えたり、顔の表現にも変化をつけ、実に入念に描き込まれています。このように、輪になった人物を描くためには、正面、側面、背面と描き分けねばならず、画家の技倆が窺える

ところなのです。

屏風の右半分では、画面は上下に分かれます。上方には刀を禿に預け、扇をもって揚屋に向かう若者が描かれ、揚屋の前に出された床机には、別の若者が遊女と話しています。その隣の床机に座る人物は月代を剃っていますので、男性のように見えますが、客ではない様子ですから、おそらく男装した若衆女郎でしょう。

下方では、露店が描かれています。老婆と若者がそれぞれ蓆を敷いて座り、台を置いて小間物を売っており、この若者の店には、高貴な身形の子供が禿を買いに遣らしています。子供には二人の従者が付き、一人は日傘を差しかけ、もう一人は童女を肩車にのせています。老婆の店の前で編笠をかぶった女性は辻占を売っているのです。

遊里に取材した場面に街頭での場面を加えてこの作品が構成されていることが分かります。しかも、この大人数の輪舞は、遊里での日常の景とは思えませんので、何か特別な行事を記念するために描いたようです。そこで、踊りの輪をよく見ますと、ちょうど真上の辺りで輪が切れ、一人の遊女が前かがみになって、歩みだしてい

ることに気づきます。この遊女は両手を出して何か数珠のようなものを掴んでいるように見えます。輪に添って左回りに歩んでいますので、おそらく、この遊女は数珠つなぎになった輪の内側を一巡し、輪の中にもどるのでしょう。

いままで、輪舞と言ってきましたが、はたしてこれが踊りかどうかは実際のところ分かりません。踊りであるとしたら躍動的に踊る姿を写すのが自然ですが、ここでは、ただ静かに手をつないでいるだけです。仮に踊りであったとしても、かなり儀礼的な意味合いの強いもののように思えます。

藤本箕山によって、江戸時代初期の遊廊の様子が記された「色道大鏡」には、遊里の行事として、盆の踊りが紹介され、「殊更傾城ばかり儀式をたててもをとらず、道俗人ごみにをどれるすがた、茫茫としてらうがわしし。」と記載があります。

ここで、注目されるのは遊女達だけが儀式をたてて踊るのではないと記されていることで、少なくともこの踊りには、儀式があったことが分かります。今は、この屏風に描かれる輪舞は、遊里での盆踊りの儀式ではないかと推測するにとどめておきます。

この作品では、人物を画一的な描写にならぬよう、入念に描き分けていることを前に述べましたが、もう一つの特徴として、輪舞の際立った構成が挙げられます。

輪舞は他の風俗画にもしばしば描かれますが、通常は楕円状に人



輪舞図屏風(部分)

物が配され、この作品のように円状に配されることは、あまり例がありません。まるで空中写真のようです。これはもちろん普通の視角的な体験からは生まれ得ないので、その意味では、かなり観念的であり説明的な構成と言えます。

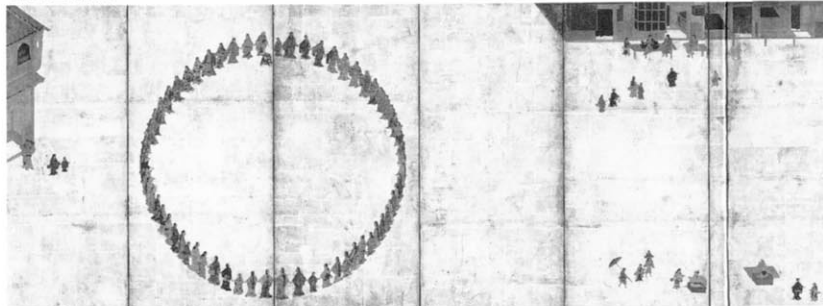
それでも、この希少な類例が「塵却記」という書物の中に見出せます。この本は、わが国最初の算術書で、著者は角倉の屋号を持つ吉田家の吉田光由です。

まず寛永四年(1627)に四巻本として出版され、四年後の寛永八年には早くも増補版が出ています。その増補版の中に「まます立」という数学遊戯が記載されており、そこに添えられた挿図に「輪舞図屏風」に近い群像表現が見られます。

「輪舞図屏風」の特色ある構成が、合理的な思考を教える算術書に見出せることは、この作品の性質を考える上で非常に示唆的です。「塵却記」は版を重ねて出版されたので、あるいは直接的な影響関係があったのかも知れません。少なくとも、両者には共通する嗜好が感じられます。

このように、素朴ですがどこか熱のこもった描写とさめた構成をもつこの屏風には、江戸時代前期の絵画作品の持つ様々な問題が窺えます。江戸時代初期には幾何学的な構図法が流行したと指摘されていますが、「輪舞図屏風」はそのような構図法の発生を考える上でも、非常に興味深い作品と言えるでしょう。(中部義隆)

輪舞図屏風



『塵却記』挿図 寛永八年版

